

天理市教育大綱【第3次】（案）概要

～集団指導から個々の「しなやかさ」を育む「共育」へ～

不確実性が増した社会の中で、次の時代を生きていくために必要な力」をどのように育むのかを常に問い直しながら、教育・保育における「こどもまんなか」の実践を行う。

個人を所属する集団の一員へと育成するという視点に立った「集団指導」の限界を認識し、個々のこどもの「しなやかさ」（レジリエンス）を育むことを重視する。

こどもたちを共に育むことで、私たちが生きる地域コミュニティ自体を育むことを目指す。

○「しなやかな生き方（レジリエンス）」ができる個人を育む。

- ・価値観が多様化し、不確実性が増した社会で、一人ひとりが自分としての幸福感を得る力を育むために、「しなやかさ（レジリエンス）」を天理市では重視する。これを構成する要素は「自己肯定感・自己有用感」「コミュニケーション力」「計画性・楽観性」「SOSを出せる力・サポートを受ける力」の4点である。

○しなやかな生き方(レジリエンス)を育む4つの要素

それぞれの要素がバランスよく機能し、維持されることで、レジリエンスが高まり、しなやかな生き方につながる。

【自己肯定感・自己有用感】

自分に自信を持ち、誰かの役に立っていると感じる経験。

困難を乗り越える心の支え。

【コミュニケーション力】

自分の考えを伝え、他者の考えを受け取る力。

多様な価値観を持つ人々とのつながり。

他者とのつながり続けることで、人との距離を心地よく保ち、多様性を認め合う。

【計画性・楽観性】

見通しを持ち、計画的に行動する力。

柔軟な思考で、変化に対応する力。

楽しさを共有し、他者とのつながりを強化する。

【SOSを出せる力・サポートを受ける力】

困難な時に助けを求め、サポートを受ける力。

他者に支えられた経験は、人を支える力となる。

周囲との関係の中で安心感や信頼感を育む。

○何かができることだけが「成功」なのか。

- ・教職員・保護者など、こどもを支えるすべての大人が「こどもが安全に安心して失敗できる、または失敗してもよいのだ。」、「これから何とかしていくことができる。」と思える環境をつくるのが大切である。

- ・「成功体験」とは、失敗しないことではなく、失敗で終わらせないこと。立ち直ることができれば、それは成功である。
- ・自分自身で折り合いをつけながら立ち直っていけるように、時間を確保して「待つこと」も必要である。
- ・「信じて待つ」ことが、こどもに「自分の力で解決することができた」という成功体験をさせるための大切なプロセスであるということを、私たちは心にとめておきたい。

以上、天理市として向こう5年間の基本認識を示した。これ以降は**具体的な活動についてどんな場面で「視点の転換」をすべきかを問題提起した。各現場でこれをもとに議論し、それぞれの活動を捉え直し、自分自身が考えていかなければならない。既にこの大綱の内容を個別に実践し努力されているケースも多くある。**こうした内容は、これまでの学校教育の努力を否定するものではなく、それぞれの努力に最大限の敬意を表す。だからこそ、今までの「成功体験」を「こどもまんなか」の原点から問い直すことが、次の時代を切り拓き、それを背負う人間を育むことになる信じている。

(1)授業(保育)

こどもの学ぶ意欲を育み、こどもにとって日々の授業が楽しく充実していると感じられる授業を目指す。

- ・個別最適な学びと協働的な学びの充実。
- ・ICTの効果的な活用。
- ・習熟度別授業や教科担任制の導入検討。
- ・体験的な活動の重視。

(2)行事

- ・子供たちが主体的に参加し、達成感を味わえる行事。
- ・自分たちで行事を作り上げる経験。
- ・保護者や地域と共にこどもたち一人ひとりの喜びや達成感を喜び合える場となるようにする。

(3)部活動

- ・試合に勝つことだけが、目的化してはいけない。技能面の向上だけでなく、生徒それぞれに役割や出番を作り、生徒の人間的な成長を目指すことが重要。
- ・地域移行を見据え、少子化が進むなかでも、こどもたちに多様な経験をすることができる活動を維持していく。

(4)校則・ルール:

- ・制服やその着こなし、髪型など学校生活全般において長年変更されず、現代に合わなくなった校則やルールがある。
- ・こどもたちが校則・ルールを主体的に考え、作り上げる経験を重視する。

- ・集団的合意を形成していくための話し合いなどのプロセスを重視し、自分たちの力で社会をより良くできるという実感につなげ、真の民主主義を学ぶ機会を作る。

(5)人権教育

- ・現在の「差別の現実」を正しく捉え、これまでの人権教育で大切にしてきた「人間の尊厳を問い直す、人間の本質を問う」ことを今の時代に深く進化させていく必要がある。
- ・情報リテラシーの向上が求められる。
- ・乳幼児期の愛着形成において育まれる基本的信頼感は、こどもたちにとって、自分を大切にすることの土台となり、成長とともに、相手を思いやること、命を大切にすること、さらには、相手の個性を認め尊重し合えるような感性を培うことにつながる。
- ・公教育の意義は、「自分の大切さと共に他の人の大切さを認めること＝誰一人生きづらさを感じないこと」、そして、様々な背景を背負っているこどもたちが集まる小さな社会において「共生の作法」を共有することである。

(6)不登校支援

- ・不登校は「定時」に学校に「来なくなる」ことが問題ではない。学校が児童生徒にとって何らかの理由で安心できる居場所でなくなったことが問題である。あるいは生きづらさから社会とつながる力が弱まっていることが問題である。
- ・児童生徒一人ひとりが、学校に来たら楽しいと感じ、学校が児童生徒一人ひとりの居場所となるように取り組んでいくことで、不登校児童生徒数は減少していくことにつながる。
- ・自宅や自室にしか居場所がない状態を解きほぐし、社会のどこかに自分の居場所がある、誰かとつながってられる。そのためにできるだけ多くの居場所を創っておくことが大切である。
- ・不登校は一つの要因から起きるのではなく、さまざまな要因が複雑に絡み合った状態で表われる。福祉部門との連携や医療的支援が必要な場合もある。学校と家庭だけが抱え込むのではなく、地域・行政などと連携し、児童生徒の社会的自立を目指した中長期的な視点での取組を重視していく。

○学校・児童福祉の現場と「ほっとステーション」

- ・学校園所での人間関係・トラブルからくるこどもの不安や保護者の子育てに関する不安に寄り添い、「こどもまんなか」の視点で学校園所の教職員とほっとステーションのスタッフがチームになって、こどもと保護者の安心を中長期的に育むことを目指す。
- ・状況に応じて、福祉分野との連携は不可欠であり重層的な支援が求められる。ほっとステーションは、市の福祉関係部局と連携を取り、対応していく。
- ・スタッフが学校園所の現場へ行き、こどもの様子を教職員とともに見立て、こどもが安心できる手立てを「レジリエンスの4つの視点がこどもに育まれるか」という視点に立って一緒に考え、教職員とほっとステーションのスタッフの役割分担を決めて対応する。

○保護者と地域と共に育む

- ・現代社会は、子育ての悩みや課題が複雑化している。
- ・子育ての情報がスマートフォンを検索すれば、あふれるほどたくさんあり、何が正解なのかを見極めることが難しい。また、小さい頃からスマホが身近にある環境の中での子育ては、親自身が育ってきた環境とは全く違う環境での子育てである。
- ・こどもは家庭・学校・地域の三者が力を合わせることで豊かに育まれると考える。
- ・こどもを取り巻く環境が多様化している背景を踏まえ、本市 PTA 協議会を中心にレジリエンスの4要素を育むために今までの活動からこども理解を深めることにシフトしていくことが求められる。

○大人の学びと学校・地域連携

- ・本市は、学校教育と社会教育、生涯教育の融合をし、地域のこどもを地域のみinnで育て支え合う「みんなの学校プロジェクト」を進めている。地域の大人が学校関係者として、児童生徒とともに SDGs など持続可能な地域社会の実現に向けた学びを創出していく。
- ・地域の多様な大人とこどもが一緒に取り組むことで、地域の大人には新たなやりがいが生み、こどもたちにとっては、自分の好きなことに会うチャンスが増え、「将来、こんな大人になりたい」と地域への愛着につながる。
- ・こどもが地域の大人にほめられ、認められ、活動の中で自分の役割を見つけ、人に感謝される経験を積むことで自己肯定感や自己有用感が育まれることが期待される。
- ・こどもたちは、地域の多様な大人と接することで学校・家庭とは違ったコミュニケーションのあり方を学ぶ機会にもなる。こうしたコミュニケーションは、こどもが教職員・保護者以外の大人に SOS を出せるチャンスを増やすことになる。

以上が問題提起である。

もう一度述べたい。

これらは決してこれまでの保育・教育現場、

そして子育ての努力を否定するものではない。

ましてや教職員一人ひとりの努力が足りないとは批判するものではない。

それぞれの現場が、こどもと共に汗を流し、その涙を受け止め、

笑顔を共有しながら成果をあげてきたことに、むしろ敬意と感謝を表したい。

故に今、皆で今までの成功体験を問い直し、

今までの当たり前を見つめ直すことで、

持続可能な取組を皆で紡ぎ出していこうという、呼びかけである。

故に可能な限り具体的な項目や事柄を取り上げた。

疑問や反論を持ちながら繰り返し読んでもらい、

その上でこの5年間で「こどもまんなか」の天理の保育・教育をつくっていこう。

ここで育まれたひとりひとりが幸せに生きていくことを信じて。